

傾向は変わりませんが、増加率でみて理科系が一・九倍であるの対して文科系が一・四倍となっています。これは、とりわけ文科系の博士課程における教育機能の強化を意味するものだと考えられます。

## おわりに—これからの大学院教育

### ◆教育機関としての大学院

一九九七（平成九）年七月、大学基準協会が全国の大学院・研究科を対象に「大学院改革の実施状況に関するアンケート」を実施しました。その集計結果をみると、大学院をもつ大学の約八割が大学院を重視してその改善や改革に取り組んでいます。また、研究科の約七割強が大学院の教育理念や目的に関する改革を実施または検討していることがわかります。近年、「学部教育」という言葉とならんで、あるいはそれ以上に「大学院教育」という言葉を耳にする機会が増えていることから判断しても、教育機関としての大学院という観点がひろく浸透しつつあるといえます。

アンケートの集計結果によると、「修士課程改善のねらい、特色」の上位二項目は「高度専門職業人養成機能の強化」「社会人再教育機能の強化」となっており、「博士課程改善のねらい、特色」のそれは「研究者養成機能の強化」「高度な学術研究機能の強化」となっています。ここに大学院における修士課程と博士課程との性格のちがいを読み取ることができるようになります。こうした状況は、すでにふれた一九七四年の「大学院設置基準」によってまかれた「大学院の多様化・弾力化」という種子が一九九〇年代になってようやくつぼみを膨らませてきた、とたとえることができるかもしれません。

#### ◆各課程の役割分化

戦前の大学院は、学術研究者の養成というほとんど唯一の目的を果たすために存在していたといえます。当時の国民にとって、大学への進学はけっして一般的ではありませんでした。そうした状況のなかで大学卒業後さらに大学院へ進むということは、きわめて例外的なことからであったことは容易に想像できます。したがって大学院は、名実ともに学術研究者の養成のみを任務として存在することが社会的に許されたといえます。

戦後の大学院は、その制度が構想される過程で、従来型の大学院像と、修士学位の創設に象徴されるあたらしい大学院像との接触・結合をへて、修士・博士の両課程をあわせもつものと



名大で最初に大学院重点化に着手した工学研究科（1号館）

してスタートしました。しかしその後の大学院のあゆみをみるかぎり、この「両課程をあわせもつ」ということについてかならずしも十分な意味づけが定着していなかったのではないかと印象をぬぐえません。それは、博士課程をもつ新制大学院の多くがいわゆる「積み上げ方式」を選んだことによって、修士課程が博士課程への単なる通過地点のようになされるようになったことからもうかがい知ることができます。

さきのアンケート集計結果にあらわれた各大学における両課程の方向づけのちがいは、ある意味では「並列方式」への移行が進んでいることを示しています。そこでは「両課程をあわせもつ」

この意味が吟味され、修士課程には修士課程固有の目的をもたせ、博士課程には博士課程固有の目的をもたせたいうえで、教育制度としての大学院全体の存在意義を再発見しようとする改革動向を読み取ることができないのではないのでしょうか。

#### ◆大学院教育

歴史的な視点からみると、修士課程と博士課程のそれぞれの目的内容をどのようなものにするのかという問題は、その時代背景や社会背景などによつて変化するものといえます。しかし少なくとも近年クローズアップされてきた「大学院教育」という発想のもとでは、大学院の教育的な機能がこれまで以上に重視されることはあつても軽視されることはないと考えられます。その結果、大学院教育としての水準を維持・向上させるために大学院カリキュラムや教授方法などが整備・充実されることになると考えられます。あわせて大学院教育用の施設設備などの教育研究環境・条件の整備も進められると考えられます。

本書では、日本における大学院の歴史を概説しながら、名古屋大学の大学院のあゆみについてのべてきました。アメリカの社会学者のマーチン・トロウが提唱した「トロウ・モデル」によると、国家レベルでの高等教育制度は、該当年齢人口に占める大学在籍率を尺度として（エリート型（一五%まで）〈マス型（一五〜五〇%まで）〈ユニバーサル・アクセス型（五〇%

以上) という三段階を通じて拡大・発展し、その目的・機能・構造が質的に変化するとされています。このモデルに照らすと、日本の高等教育制度は〈マス型〉の段階にあるといえます。そして二一世紀のはやい時期にはつぎの段階へと移行するだろうと考えられています。

大学入学者数の増加によって大学の目的や機能に変化がもたらされるであろうことは、戦前の旧制大学と戦後の新制大学をくらべることで容易に理解できると思います。では、おなじことが大学院についてもいえるのでしょうか。この問いに対する答えの手がかりは、戦前の大学院と戦後の大学院あるいは戦後の大学院における研究者養成機能と高度職業人養成機能の比較、さらには大学院の教育機能強化の中身の検討などによって得ることができるように思います。

#### 〈引用文献・主要参考文献〉

- 海後宗臣・寺崎昌男 『大学教育』 (東京大学出版会、一九七六年)
- 市川昭午・喜多村和之編 『現代の大学院教育』 (玉川大学出版部、一九九五年)
- 名古屋大学史編集委員会編 『名古屋大学五十年史 (通史一・二)』 (名古屋大学、一九九五年)
- 細井克彦 『設置基準改訂と大学改革』 (つむぎ出版、一九九四年)
- 日本近代教育史料研究会編 『教育刷新委員会・教育刷新審議会 会議録』 (岩波書店、一九九六～一九九八年)

- 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史（通史一～三）』（東京大学、一九八四～一九八六年）
- 大学基準協会十年史編纂委員会編『大学基準協会十年史』（大学基準協会、一九五七年）
- 名古屋大学自己評価実施委員会編『明日を拓く名古屋大学（二・三）』（名古屋大学、一九九五・一九九七年）
- 羽田貴史『戦後大学改革』（玉川大学出版部、一九九九年）
- 大学基準協会『大学基準協会会報 第四号』（大学基準協会、一九四九年）
- 文部省内教育史編纂会『明治以降教育制度発達史 第五卷』（昭和三十九年版復刻、芳文閣、一九八五年）
- 近代日本教育制度史料編纂会『近代日本教育制度史料 第二四卷』（講談社、一九七六年）
- 岩山太次郎・示村悦二郎編『大学院改革を探る』（エイデル研究所、一九九九年）
- 喜多村和之『現代の大学・高等教育―教育の制度と機能』（玉川大学出版部、一九九九年）

著者略歴

山口 拓史（やまぐち たくじ）

一九六二年、兵庫県生まれ

一九九四年、名古屋大学大学院教育学  
研究科博士課程（後期課程）単位取得  
退学

現在、名古屋大学史資料室助手  
専攻 高等教育史

名大史ブックレット1

これまでの大学院・これからの大学院

二〇〇〇年二月二〇日 第一刷発行

二〇〇一年九月一〇日 第二刷発行

著者 山口 拓史

編集発行 名古屋大学史資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二（七八九）二〇四六

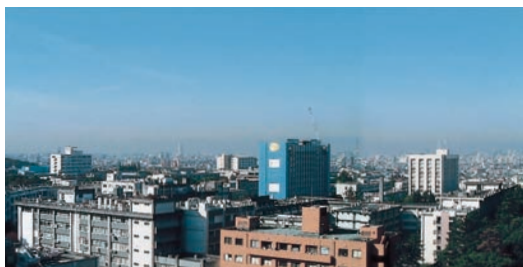
印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九一〇

電話 〇五二（八七二）九一九〇







表紙写真：中・高層建物が増えてきた東山キャンパス

右は工学研究科1号館(8階建)、中央は総合研究棟(建設中)、その左後方が人間情報学研究科(8階建)、左は国際開発研究科(8階建)。